

東大寺二月堂修二会（お水取り）をふり返る

橋本 聖圓
佐藤 道子
聞き手 高桑いづみ

2011年10月22日、「東大寺二月堂修二会（お水取り）の記録—東京文化財研究所無形文化遺産部所蔵記録をめぐって—」と題して無形文化遺産部主催の第6回公開学術講座をおこなった。前半は、修二会の調査に長年携わってこられた佐藤道子名誉研究員の講演を中心に据え、後半は東大寺の長老橋本聖圓しょうえんと佐藤道子名誉研究員の対談、という構成であった。対談は大変意義深く、修二会をいくども体験された橋本師のお話は、他ではうかがうことのできないものであった。橋本・佐藤両先生のお許しをいただいて、その様子を紙上で再現したい。

高桑 プログラムでは対談となっていますので、おふたりに自由にお話いただければよいのですが、門外漢の立場で私も伺いたいことがございますので、この場に参加させていただきます。私は学生の頃から数回聴聞した経験があるだけで、全くの素人です。至らぬ点はどうぞお目こぼしてください。

なお対談のバックとして、1973年の修二会の写真をスライドで流します。聴聞なさったことのない方も修二会の雰囲気は少しおわかりいただけるのではないかと思います。

では、橋本先生をご紹介いたします。橋本先生は東大寺の塔頭たっちゅう、龍蔵院のお住まいで、2001年4月に華嚴宗の管長、第217代の東大寺別当職べっとうにお就きになりました。現在はその職をお引きになられて長老というお立場でいらっしゃいます。今日のために奈良からおいで下さいました。

橋本先生は、日本美術史の立場から華嚴の美術について論文もお書きになっていらっしゃいますが、修二会の練行衆れんぎょうとして初めてお籠もりになられたのが昭和36年。それから何回もお籠もりになっていらっしゃいます。私たち、特に女性ですと局つぼねといういくつも格子を隔てたところからしか聴聞できませんが、それでも大変ありがたい法会だということは身に染みて感じます。実際にお籠もりになられた橋本先生は修二会をどのように感じていらっしゃるか、まずうかがいたいと思います。

橋本 私は、修二会に籠もりましてもいろいろと失敗したり周りに迷惑をかけたりしておりまして、修二会の落第生を自認していたのです。寺の中で育ちまして、小さい時から松明を担いだり声明の真似をして遊んでおりましたし、のちには修二会の写真を撮りに通ったこともありますので、初めて籠もりました時も大体のところは分かっているつもりだったのですが、いざその場に身を置いてみますと右も左も分からず、次はこうするんだと言われても、ただうろろろするばかりでした。所作などを間違えますと、周りから「シッ」「シッ」と合図をしてくれるのです。勤行中には私語ができませんので、松明について上堂する時にも次の人に「シッ」と会釈してから段を登りますし、「走りの行法」

のあとで香水^{こうずい}を頂く時にも「お先に」という意味で「シッ」と挨拶をしますので何も叱られているわけではないのですが、上席の人たちから一斉に「シッ！」「シッ！」と言われますと縮み上がってしまいまして、なおのこと間違いをくり返すという始末でした。

佐藤先生が『東大寺修二会の構成と所作』（『芸能の科学』6・7・12・13号）をお書きになってからは、修二会の輪郭を頭に置いて聴聞に来られる方もいらっしゃるのですが、私などは寺の中で育っているながら、初めの数年の間は次に何をすればよいのか、なかなか理解できませんでした。上の人に言われるまま、間違えないようにしよう、叱られないようにしようということに終始していたように思います。やっと満行^{まんぎょう}に辿り着いた時にマスコミの方が取材に来られて、「心境はどうか？」「来年からの抱負は？」などと訊かれたのですが、抱負を語るどころではありませんでした。近頃は佐藤先生の本をじっくりと読んでから籠もる人が多いのでそんなこともないようですが、私などは、とにかく間違えないようにするのが精一杯でした。

3、4年経ってからちょっと我にかえったような気がしたのは、^{かずとりさんげ}「数取懺悔」の時でした。行中^{ぎょうちゆう}に数回、堂司^{どうつかさ}の指示に従って懺悔の作法をする時があるのですが、^{まつ}末座の者数名は、内陣から礼堂^{らいどう}に出て数珠を擦り上げながら礼拝を繰り返します。それが終わったところで、内陣の奥から^{だいでうし}大導師の唱える懺悔の祈願文の声が響いてきました。鈴を打ち鳴らして唱える大変荘重な節ですが、「練行の諸衆、^{だいしやう いじんき}大聖の威神力を仰ひで、^{こんしゆ}六時の行法を勤修すと雖も、^{ぐぼく ほんぶ}具縛の凡夫なるが故に、ややもすれば威儀を破り、次第を乱ず。懺悔せずんばあるべからず。」というくだりがあるのです。それを聴きました時に、我々の遙かな先輩にあたる練行衆の中にも自分を「具縛の凡夫」と思っ行って行をしていた人があったのかと思ひまして、何か救われたような気がしました。皆に叱られないように立派にやらなければならないという気持ちが、ちょっと吹っ切れたように思いました。そんなことがあって、段々と気持ちに余裕ができてきたこともありまして、大導師の祈りを聴いたりしているうちに、自分の生き方や人と世界のあり方という大袈裟ですが、人間は今のような生き方をしているはいかんのじゃないか、などと考えるようにもなりました。

私は、小さい時から集団行動、チーム・プレイというようなことが苦手でして、練行衆になっても、皆と調子を合わせて所作をしたり声明を唱えるのはあまり得意ではありませんでした。^{じどうし}時導師に当たりますと、悔過^{けか}や宝号^{ほうごう}の頭^{とう}を取りますが、テンポが速くなってくると、皆が唱和する声に追っかけられてどちらが先に唱えているのか分からなくなることさえありました。ところが、3年目になると^{じんみやうちやう}神名帳を読む役が当たりますし、5年目には過去帳^{かこちやう}を読ませてもらいます。こういうものはひとりで読むのですから、自分のペースで読み進めることができますので嬉しかったです。特に過去帳は、大伽藍の本願聖武天皇から^{ろうべん}良弁僧正、鑑真和上など、歴代の尊敬する方々のお名前を練行衆一同を代表して読み上げるわけですし、節回しが荘重でありながら過去帳の名から連想されるような暗さがなく、弾むような調子がありまして、それを4回も読む機会に恵まれたというのはありがたいことでした。そんなことで5回目の^{さんろう}参籠を済ませますと、「^{これん}古練」といひましてベテランの練行衆ということになるのですが、私などはベテランどころではなく、やっと練行衆らしくなってきたかなという程度でした。

高桑 ご自分の罪業を懺悔すること、身を清めること、その功德によってこそ天下泰安や五穀豊穰、^{ばんみんけらく}万民快樂を祈ることができる。悔過会が一番の真髓を、中にいらしたからこそお感じになられたのですね。

^{ひらしゅう}平衆でいらしたときと^{ししき}四職、^{しゅうし}司や^{しゅうし}咒師、^{だうしゅう}大導師におなりになったときでは感じ方も変わってこれたのでしょうか。

橋本 私は、今も申しましたようにお経を速く読むよりもゆっくりと丁寧に読むのが好きで、神名帳や過去帳も他の人たちよりもゆっくり読んでいましたが、平衆の間は、ひとりで声明を唱える機会がごく限られています。また四職になりましても、^{どうつかさ}堂司は進行係ですから、命令や指図の言葉を発することが主になります。ところが、咒師になりますと、鈴を振って真言陀羅尼を唱えて道場を结界したり四天王を勧請したりして、ひとりで大活躍するのです。初夜と後夜では節が違いますが、どちらも大声を出して力強く勤めます。大きな灯明が須弥壇の各面に灯ってしまして、その前に立って四天王にそれぞれ眷属を率いておいで下さいと呼びかけるわけですが、目をつむって四天王の梵語の名を呼んでいますと、目の前一杯に拵がった灯明の焰の向こうに眷属を率いた四天王のお姿が浮かんでくるような気がして、高揚感のようなものを感じます。これは平衆の時には経験できなかったことで、何年か勤めておりますうちに、この役はひとに譲ってはなるものかという気になったくらいでした。

大導師になりますと、初夜と後夜の悔過のあとで長い祈願文を読み上げます。練行衆を代表して行法の趣旨を述べて、諸仏菩薩の加護を祈る重い役です。聴聞者の中には最も退屈な時間帯だとおっしゃる方もありますが、古風な文体と格調のある節付けには独特の力があって、唱えておりますと自ずと厳肅な気持ちになってまいります。

私は^{わじょう}和上の役はできませんでしたが、咒師や大導師を勤めたことで、平衆の時とは違う高揚感や敬虔な気持ちを味わうことができありがたかったと思っております。

高桑 私たちは局からしか聴聞できないのですが、そのような敬虔な気持ちでお籠もりになっていらっしゃる、それはひしひしと伝わってきます。寒いところでほとんど誰にも知られずに世界平和を唱えていらっしゃる、それが西暦752年からずっと続いている、その続いてきた中のひとりの聴聞者として私が今ここに座っている、ということを実感したときに、すごく長い人間の営みを感じたことがございます。修二会の場合、不退の行である、いちどもとぎれることなく続いているという点を大事にしていっていますが、それについてはいかがでしょうか。

橋本 東大寺はもともと官立の寺ですから、^{しゅうしゅうえ}修正会、^{ぶっしょうえ}仏生会、^{けいじょえ}解除会などの大きな法要は朝廷の命令で始められたものが多く、それに要する経費も官の手で用意されていました。平安時代には代表的な大法要が「^{じゅうにだいえ}十二大会」と呼ばれていましたが、二月堂の修二会はその中には入っていません。

二月堂の修二会については、宮中の皇后宮職に置かれていた十一面悔過所の行事が東大寺に移されたものという説もありますが、どうもそうではなさそうです。平安時代の末に編纂された『東大寺要録』には「東大寺権別^{じつちゅう}当実忠二十九箇条事」というのが収められていまして、これは実忠和尚が自身

の業績を箇条書きにされたものです。それに拠りますと、二月堂の修二会にあたる「十一面悔過」が天平勝宝4年（752）に実忠和尚によって始められたことが分かります。皇后宮職に十一面悔過所があったことは天平勝宝5年の正倉院文書にも書かれているので間違いはありませんが、密教系の観音信仰が宮中に浸透した時期に外に移されたというのは、不自然なことのようには思います。

昭和50年代に、佐藤先生の調査研究に触発されて「二月堂研究会」という若い研究者の会ができて私も入れていただいたのですが、その研究会の討論では、二月堂の修二会は宮中の十一面悔過が移されたものではなく、当時「^{けんさくどう}羅索堂」と呼ばれていた今の法華堂を中心に活動していた人たちが、のちに「羅索堂衆」と呼ばれた人たちの先輩に当たりますが、その人たちが自らの信仰の証として十一面悔過を始めたのが二月堂の修二会の始まりであって、それを主導したのが実忠和尚であろうという説が有力でした。公式行事としての^{だいゑ}大会ではなく、いわば私的な法会と見なされていたことや、惣寺の^{そうじ}支配を受けずに自治的な運営に任されていたことなど、二月堂の修二会に見られる特徴的な性格も、そのような観点から見るとよく分かるように思います。

天平勝宝4年という年は、十一面悔過が始められてから2ヶ月経った4月9日に大仏開眼供養会が行われていますので、東大寺が創建された年とされていることがあります。のちに大仏殿や講堂、東西両塔、三面僧坊などが建ち並んで大伽藍の中心となる辺りは、その頃にはまだ工事の最中だった筈です。鑑真和上とその一行が来日されて、戒壇院を拠点として活動を開始されるのはそれから2、3年経ってからのことですから、天平勝宝4年当時に、東大寺の僧侶といえるのは羅索堂とその周辺で活躍していた人たちだったと考えられます。羅索堂に附属する一群の建物を含めて「羅索院」というようになるのですが、その羅索院の一堂として建てられた小さな観音堂が、今の二月堂に発展したと考えられています。

実忠和尚の呼びかけに応じ、その観音堂で十一面悔過の行を始めた人たちには、官の命令によってではなく自分たち自身の行、自らの身心を清めて仏道を歩むために悔過を始めたからこそ、この行法だけは止めるわけに行かない、廃れさせてはいけないという意識が生まれたのであろうというのです。平安時代の後半には、既に「^{ふたい}不退の行法」と呼ばれるようになっていたそうです。

ところが、平安時代の末に源平の戦で伽藍が焼かれたことをはじめとして、東大寺が衰退した時期はその後も度々ありまして、伝統のある行事で廃れたものが幾つもあったのですが、二月堂の修二会が困難を乗り越えて続けてこられたのは、これだけは何があっても続けなければならないという意識があったからでしょう。

そういうことを考えますと、私たちも是非続けて行かなければならない、「不退の行法」を護らなければならないという気持ちになります。これは今の練行衆にも共通の気持だろうと思います。

高桑 近いところでは、明治維新の折りに廃仏毀釈でお坊様の数が足りなくなり、興福寺のお坊様にも参籠していただいて勤めたとか、第二次世界大戦の時は灯火管制で火を焚いてはいけない、音を立ててはいけないという中でなされたとか、いろいろなご苦労話があるのですが、その中でも続けてこられた意味はさぞ大きいだろうと思います。

ここで佐藤先生に伺いたいのですが、佐藤先生は長い間修二会を聴聞していらして、たくさん報告

書もお書きになっていらっしゃると思います。研究的なお立場を離れて修二会を身近に感じられた思いが
ありだと思いののですが、いかがでしょうか。

佐藤 多分、お水取りに伺ったものは誰でもそうなると思うのですが、仕事を離れて没入できる、そ
ういう法会だと思うのです。今、練行衆のお立場からお話がありましたけれども、聴聞する立場の
人間も、やはりどこかで信仰心のようなものが芽生える、自分が具縛の凡夫だということをはっきり
と認識する。そういうところが、修二会が続いていく元になるのではないかと思います。私も、研究
とは別の次元で、その場の雰囲気や、お坊様が感じていらっしゃることを感じながら録音させて
いただきました。

例えば、3月7日は小観音さまの日です。この日に小観音さまが大観音様の前に移られてげしちにち
ご本尊になれるのですが、お厨子を礼堂にいったんか担き出して、こや後夜の法要が終わったときに中へ
お入れになる作法がございます。内陣からお厨子が礼堂へ出てこられるときに、練行衆が本当に大切
そうにお厨子を抱えてお出になるのです。そのときには、行事を調査させていただいているという感
じではなく、本当にご本尊がお出ましになるんだという感じを持ちました。おそらく練行衆もそうい
うふうにしてお勤めになっているんじゃないでしょうか。そういうところがこの法会のすばらしい
ところだと思います。

高桑 私たちならばお坊様がなさっている行に目がいきがちですが、そうではなくて、待機してい
らっしゃるお坊様のお姿が印象に強く残られた、ということもお書きになっていらっしゃるね。

佐藤 12日にみずとりしゅう水取衆があかいや咒師さんしゅうのいちを先頭にお堂を下って関伽井屋に行かれます。その間、衆之一さんが
ごたいばん五体板の前に正座して待っておられるのです。50分ほどもあったでしょうか。それが実に風格があ
ると申しましょうか、その姿に打たれたことがございました。その時に、役がついているとかいない
ということとは別に、水取りの聖性と申しましょうか、これは大切な行事なんだという認識が行き
渡っておいでになるんじゃないか、何年も何年もお籠もりになっていると、そういうものが自然に身
につくんじゃないかと思ったことがございました。

橋本 それは練行衆だけじゃなくて、三役の人なども同じですね。私が子供の頃は12日だけは大勢の
人で賑わっていたのですが、ほかの日には松明が上がる時に近在の子供たちが集まって騒いでいた
だけで、二月堂の辺りに人影が見られないことも珍しくはなかったのです。声明の声とさしかけ差懸の音だけが
響く真っ暗な堂内の雰囲気は、何ともいえないものでした。そんな中で、年配の堂童子さんが礼堂の
りんどう輪燈という灯明に油を注いでおられた姿を今でもよく思い出します。その方の容貌や所作が実に上品
で、古い墨絵を見るような心地がしました。堂童子さんはじんじょう晨朝の時に食堂のびんづるぞんじゃ賓頭盧尊者にお粥をお供
えしますが、その前に、礼堂にしゅうがん蹲踞して内陣の和上にじゅうじき咒願を請う作法があるのです。その方が「粥食
咒願」といわれる時は実に恭しい口調で、心から観音さまにお仕えしていらっしゃるという感じがし
ました。練行衆だけではなくて、周りの人たちもそんな気持で勤めてきたと思います。

高桑 たくさんの方の思いに支えられて修二会がここまで続いてきた、ということですね。ここで、私どもが所蔵している録音を聞いていただこうと思います。

1969年3月4日、後夜の悔過作法をお聞き下さい。

高桑 ご本尊の御名を何回も何回も唱えて自分の体を五体板に打ち付ける、初めて聴聞したときに、こんなに人間は罪深いのかものすごく感じたのですが…。

橋本先生、五体は、チベットでなさっている五体投地ごたいとうちと関係が深いのでしょうか。

橋本 私はそういうことを研究したことがないのでよくは分かりませんが、インドやチベットでは、仏教徒だけではなくヒンドゥー教やジャイナ教の修行者も五体投地をされるようです。幾つもの宗教で聖山として崇められているカイラス山やその近くのマナサロワールという聖なる湖の周りを、五体投地をしながら巡礼する人たちの姿を紹介したテレビ番組がありましたが、その五体投地は二月堂のように様式化されたものではありませんから、額と両手両足を大地に投げ打つような礼拝でした。巡礼者の額は、ごわごわに堅くなっているようでした。佐藤先生がおっしゃるように、修二会には達陀だつたんのように異国的な要素がいろいろありますので、五体投地も関係があるのかもしれませんがね。

高桑 今お聞きいただいたのは後夜の称名悔過しょうみょうげかですが、初夜になるともう少しゆったりとした節になって、同じ文言でも唱え方が変わります。私のように音楽を研究しておりますとその変化がおもしろくて、音楽的な興味でわくわくしてしまうのですが、時じによって変わる唱え方のお稽古も別火のときになさるのですか。

橋本 東大寺開山の良弁僧正ろうべんの忌日が12月16日で、毎年その日の朝、法要が始まる前に翌年の練行衆の交名きょうみょうが管長から発表されます。中には、それから直ぐに声明や法螺貝の稽古を始める人があるようです。年末に法螺貝の稽古をするのを「師走貝しわすがい」というのです。他の法要にもそれくらい熱心に取り組んだらいいのですが、修二会というのはやはり特別ですね。初めて参籠する人は、別火に入る前に、管長以下全員の揃っているところで時導師の役を所作も含めてやって見せなければなりませんし、別火中にも練行衆に唱和してもらって、繰り返し稽古をします。ひとりで稽古している時には何十回と繰り返しても間違えないのに、皆が付き合ってくれと間違うとか、別火では大丈夫だったのに内陣では間違えるというような具合で、どれだけ稽古をしてもなかなか百点満点とは行かないものです。

高桑 詞章本がおありだと思いますけれど、それよりは口伝で節を覚えていかれるのですか。

橋本 所作と言葉と節が時じごとに違いますし、それが日によっても変化するので、それを全部憶えるのは大変です。次第本や声明集などにはありますが、基本的な事が書いてあるだけですし、節付けは

あってもそれだけを頼りに唱えるのは無理です。私などは主として父に習ったのですが、日頃はぞんざいに口をきいていても、稽古の時だけは白い着物に着替えて仏間に坐り、言葉遣いも改めて教わっていました。習った通りに何度繰り返しても「違う」と叱られるので腑に落ちなかったのですが、あとでテープに録音して聴いてみると、これでは叱られるのが当たり前だと頭を抱えてしまったこともありました。録音テープは使い方によっては参考になるし、後日のための記録としても役に立ちますが、カセット・テープができてから、テープを頼りに稽古をする人が増えたのはちょっと気懸かりです。師匠の前で繰り返し稽古をして、よくないところを直してもらうのが大事だと思います。私自身、先輩や父から教わったことを充分身につけていないので、自信をもってあとの人に伝えることができないのですが…。

高桑 今お聞きいただいた音源は佐藤先生が選ばれたのですが、400本ある中から1969年の録音を選ばれたのは、今橋本先生がおっしゃったことと関係がおありですか。

佐藤 声明が得意な方と不得手な方がいらっしゃいまして、実際に聴聞していると自然にわかってくるんですね。この方の音をいただいておこうとか、この方だと間違いなからうという計算をしてしまう。こちら側も具縛の凡夫だなと思いますけれども、そういう選択をした結果、1969年の録音になったのだと思います。

先ほどお聞きいただいた後夜の時導師は、お声を聞くと川原さんですね。この方はお父様の代から引き続いて1年も欠かさずにお勤めになった方で、何というのでしょうか。神名帳もそうでしたけれども、この方のお唱えにはある種の雰囲気があると、私は感じておりました。

高桑 声が揃っているとかいない、ということとは別な思いが大切なわけですね。私も具縛の凡夫なものですから、どうもそちらの方にはなかなか耳が行かないのですが、この録音を選ばれたというところに、思いを馳せなければいけないと思いました。

佐藤 時代によって少しずつ変わってくるのは当然です。人間のすることですから、変わって行くところに命があると考えれば当然のことですけれども、私が伺い初めの頃は雰囲気と申しましょうか、練行衆全員に感じる場所がありました。それがだんだん薄くなってきているような感じがいたします。それは時代の影響であろうかと思えますけれども。今ではお籠もりの方に平成生まれの方が非常に多くなりましたが、私の伺い初めの頃は、まだ明治生まれの方がお勤めになって、お若い方で昭和生まれの方がお勤めになっていた。そういう時代の影響というものが、法会にも感じられます。

高桑 そのお話は大事ですのでまた最後に伺うこといたしまして、別火について少し橋本先生にお伺いしたいと思います。修二会が特別だということは、もちろん行自体が大がかりで複雑だという意味ですが、それ以外に、その前に別火をなさる、という意味がとても大きいのではないかと思うのですね。別火の間に修二会の準備を重ねて、修二会でご自身が身につける衣や使われる道具を手ずからお

作りになる、全部ご自分たちでなさる、そういう期間を設けていらっしゃる事がとても大事なように感じるのですが。

橋本 昔は、別火を3ヶ所に分かれてしていたということですが、今は戒壇院の庫裡^{くり}で全員が合宿して勤めています。もともと東大寺の僧侶は僧坊生活で、学生寮のような所で暮らしていました。先輩の僧たちからしごかれて随分厳しい生活をしていたようですから、別火坊に入ってもあまり違いはなかったのかもしれませんが、今は世間一般とさほど変わらない生活をしています。新聞やテレビ、コンピュータなどから離れて中世以来の風習が残っているような古風で簡素な環境に身を置いて、お経の稽古や行中に使うものの準備に明け暮れるのですから、その違いは大きいです。不便で窮屈な生活ですが、日頃の生活から離れることで気持も改まってきます。段々と練行衆らしい心構えができてくるのです。そういう意味で、大事な段階じゃないかと思います。

別火の前半は「試別火^{ころべつか}」といいまして、自坊^{じぼう}に忘れ物を取りに帰ったり担当の部署に顔を出すようなこともできるのですが、後半になりますと「総別火^{かみこ}」といいまして、紙衣^{かみこ}を身にまとして広間の所定の席に坐って過ごします。庭にも出られませんし、室内では私語もできません。食事も、無言で一定の作法に従って摂るという具合で、一段と窮屈になります。しかし、そういう段階を経ることで日常生活の俗っぽい気持から離れて、本行に臨む心構えができるように思います。本行が始まる時に自坊から出かけて行くというのでは、一寸あの行法は勤まらないのではないかという気がします。

しかし、行中は何もかも厳格で窮屈なことばかりというのではなくて、休憩の時には冗談を言い合ったりもしています。私が籠もり始めた頃は、大導師や和上あたりの人から手厳しく注意されることもあったので、老眼鏡越しにちょっと見られるだけでもピリッとするくらいでしたが、父の話では、昔は上下の関係がもっと厳格で湯屋でも上の人の中を流したりしたそうです。今は和上が末席の人に呼びかける時にも「処世界^{しよせかい}さん」と言うくらいですから、上下の隔たりがなくなってまるで友達同士のようになっています。和やかでいいのですが、作法や声明の伝承のためにはあまりくずれない方がいいとも思います。

高桑 それはお寺だけではないような気がいたしますけれども…… 修二会での寺席がお寺の寺席とは関係なしに、お籠もりになった順に決まるということもご著書で読ませていただきましたが、それもすごいことだなと思います。お寺で上席の方が必ずしも修二会で偉い役につかれるわけではないということですね。

橋本 修二会は、先程も申しましたように練行衆自身の悔過行として始まったらしく、公式の大会としては位置づけられていませんでしたから、惣寺の支配を受けずに営まれていたということです。経済的な援助はあっても、大会の場合よりも格の低い扱いで、行事の進行に関してはすべて練行衆の手に委ねられていたようです。今でもそうですが、行中に何か問題があると「お集会^{しゅえ}」といいまして、四職の人が集まって相談をするのです。勿論、よほどの大事があった場合は寺務所に連絡しますが、大抵のことは練行衆が自分たちで取り仕切っています。

また、練行衆の席次は原則として参籠の順になっていまして、初参籠の早い人が上になります。それを「堂順」と言っています。日頃は「娑婆順」、出家した順番に従っていますが、修二会に関しては堂順が重んじられまして、そんなことにも修二会の独自性が見られます。

それから不思議なことですが、修二会の間には二度「授戒」の行事があります。東大寺の僧侶の多くは「具足戒」という高度の戒を授かってずっとそれを保っていた筈ですが、練行衆は参籠の都度、それよりもずっと素朴な戒を受けるのです。在家の方が日を限ってお受けになる「八斎戒」に少し付け加えられた、ごく簡単な戒をわざわざ受けます。どうもこれは、二月堂の練行衆の集団が寺内一般とは違う、特別の世界を形成しているのだということらしいのです。

そういう特別な行法である修二会に8回参籠したとか、10回参籠したとかいうことに誇りのような気持を持っている人が多いようで、ひとの参籠回数を間違えたりすると叱られてしまいます。先程、凡夫であることを自覚してと申しましたのと矛盾するようですが、そういう気持も、行法を長く伝えて行くためのひとつの力になっているのかもしれない。

高桑 いろいろな意味で特別な思いのこもった行法ですね。ここで、佐藤先生に調査について伺います。先生は『芸能の科学』に4回にわたって報告をお書きになり、ビクターから『東大寺修二会観音悔過』という6枚組のレコードをお出しになるなど、さまざまな方法で調査の成果を広めていらっしゃいました。私どもが修二会を聴聞するときは、『芸能の科学』4巻をバッグに入れて二月堂に登り、今どこをなさっているんだらうとご著書で確認しながら聴聞した記憶がございますが、佐藤先生が初めて聴聞なさったときは本当に手探りだったのではなかったかと思います。どのような状況で調査なさったのですか。

佐藤 はじめは、女性は局から中へ入れないということも知らずに伺いました。あるとき私が局にいて録音しておりましたら、イタリアのマリオ・マレガ神父さんが外陣を巡って聴聞していらしたので。その方がスッと近寄ってこられて、「今どこをやっているのか分かりますか」とおっしゃるんです。私が「分かりません」と言いましたら「今ここです」と大咒願のある部分をお指しになった。このように全く予備知識なしに二月堂に上がったという状況でした。恐らくその時代に伺った人には、そういう人が多かったのではないかと考えております。

高桑 それでもそれがきっかけになって、40年調査を続けられることになったというのは大変不思議なことですね。けれども、もちろん外陣には入れませんし、女性ゆえのハンディといえますか、そういう点でのご苦労はたくさんあったのではないのでしょうか。

佐藤 苦労と言えば苦労ですけれども、逆を申しますと、お寺でおっしゃられることを守っていればいいというひとつの枠がございました。それから非常にいい出会いに恵まれたということがあります。いつどこで誰が何をどういうふうにしたということをメモしておりましたが、それを文字化したときに出会ったのが北河原公海長老とおっしゃいまして、現在の管長さんのおじいさまに当たられる

方でした。この方は大変丹念に私が書いたものを読んで下さった。そして、ここはこういうことをしております、ここは間違っていますと指摘して下さいましたのです。その方のお陰であの4冊の本ができたと言えます。また先ほど申しましたように、ある種の雰囲気というものが二月堂に、修二会のとくに充ち満ちていた。それに浸りたくて伺ったという面がありました。そのころお籠もりだった方は、まだ第二次世界大戦の影響がありまして人数が少なくていらしたんです。ですから同じ方が何回も同じお役でお勤めになることが割と多かったのですが、その中の上司^{かみつかさかうん}海雲さん、私はある意味で傑僧だっているんですけども、その方が、「わしゃ1年間悪いことばかりしよる、いいことは何もせんと悪いことばかりしよる、だからお水取りは本気やで」とおっしゃるのです。本気やで、とおっしゃるのが本当に分かるようなお籠もりぶりでした。そういう方がおいでになって、そういうお籠もりを拝見して、文字化したものを見て下さる方がいらした。それであの本ができたというふうに思っております。女性だから男性だからということではなく、いい出会いに恵まれた、いい時期に伺えたのだと思っております。

高桑 それは佐藤先生のお人柄が大きいのだろうと私は思います。それでもやはり、今まで女性が聴聞することがほとんどなかったのに、女性が調査したいと言われたとき、東大寺のお坊様方が当惑されたのではないかと思うのですがいかがでしょう。たとえば、写真はほとんど横道萬里雄先生が撮って下さったそうですけれども、堂内は暗いし、フラッシュをたかなければここまで鮮明に撮れないですよ。それを撮らせて下さった。どうやってもシャッターの音がしますから、一所懸命声明を唱えていらっしゃるときに邪魔になったのではないのでしょうか。また、正面のご本尊の前にお壇供と言ってお餅を積み重ねていますが、あそこにマイクを置いている写真が残っていたんです。真正面にマイクを置かせていただいたことに驚いてしまったのですが、それについてはお寺ではいかがだったのでしょうか。

橋本 初め2、3年の間は横道先生がおひとりで調査に来ておられたのですが、その頃に上席の人たちがどんな経緯で調査に便宜を計ることを決めたのか、その間の事情は何も知りません。私が2度目の中灯^{ちゅうとう}の役を勤めていた頃から、佐藤先生もおいでになりました。その頃に、大宿所^{おおじゆくじよ}の入り口で横道先生が時数帳^{じすうちょう}の写真をお撮りになったことを憶えています。時数帳というのは毎日の時ごとに導師を勤める時導師の名を列挙したもので、奉書紙に墨書して綴じたものです。書記の役にあたる中灯が別火の間に作っておくのですが、私は稀代の悪筆でして、金釘流の文字を書き連ねたものが国立文化財研究所の調査資料になるとはと頭を抱えてしまいました。それが、研究所のご調査と私との最初の接点でした。

先にも申しましたように、その頃の私は先輩に教わった通りに一所懸命にやろうとしていただけで、その意味を考える余裕もなく、研究的な立場から修二会を見ようとは夢にも思っていなかったのです。ところが折に触れて横道先生や佐藤先生からいろいろなお話を聞かせていただく機会がありまして、御著作をいただくようなこともありました。また、二月堂研究会の討論会に参加して新進気鋭の研究者の見方にも啓発されたこともあって、修二会の奥深さが少しずつ分かってきました。横道先

生や佐藤先生がお書きになったものを読ませていただいて、修二会全体の輪郭を把握することができましたし、自分たちが内陣で行法を勤めている間に、三役の人や童子さん達が周りで支えてくれる仕事の内容までがよく分かりました。資料収集と調査報告を踏まえてそれを研究に高めて行かれた結果、例えば、様々な社寺の伝統行事と比較して修二会がどんな特色を示しているか、どのような歴史を経て修二会が今に伝えられているのかということも教えていただきました。修二会についての認識が深まったことが、練行衆としての心構えができることの契機にもなったと思っております。

東大寺だけではなくて奈良の寺々や京都の醍醐寺さんなどもそうですが、研究者に対する理解は、元々かなりあるのです。東大寺図書館においてになるさまざまな分野の研究者に接する機会も多いので、研究者を大事にする気風が寺の中に伝わっているような気がします。仏像が礼拝の対象であるだけでなく、美術史の立場から文化的、芸術的価値があるものとして研究の対象になっているということは皆が当然のことと知っているわけですから、それと同じように、祈りの行為である行法を芸能史の立場から研究されるということについても、大半の者はさほど抵抗を感じなかった筈です。それよりも、佐藤先生が女性でいらっしゃるために別火坊には入っていただけない、内陣の行法を充分にご覧になれないということに、申し訳ないという気持ちがありました。修行の足りた練行衆ばかりでしたら女性が身近におられても差し支えはない筈ですが、何しろ具縛の凡夫ばかりですから、そんなしきたりができたのだらうと思います。

いろいろと制約のある中で、声明の録音をされるだけでも大変ですのに、その上克明にメモを取られたり、古文書を綿密にお調べになって研究を進めて行かれるお姿を見ているうちに、寺の者にはとても真似ができないという気持ちが生まれていた筈です。長い年月のうちに、両先生の研究者としての真摯で謙虚なお姿に皆が頭の下がる思いをしておりました。もし最初の年にマイクを内陣に入れたいとおっしゃったなら、これはとても通らなかつたでしょうけれど、あの先生方がおっしゃるならしょうがないと思うようになっていたからこそ、例外的なご協力をする結果になったと思います。

高桑 『芸能の科学』で最初に報告を始められるまで、6年間の調査を重ねてお寺との信頼関係を築かれたわけですが、その最初の成果が昭和50年の1月に行った公開学術講座ですね。お配りしたテキストにその時のパンフレットの表紙と見開き部分を載せていますが、上司海雲先生からご挨拶文をいただいています。1月という時期に2日間にわたって公開講座を開いて、有楽町の朝日講堂で悔過作法を勤修していただいた。それがお寺の外で初めて修二会をなさったことだそうですけども。

橋本 寺の外で行うことに抵抗がなかったとは言えないのです。山内の会議でも、日頃は見られないような激論がありました。それまでも劇場で天台声明や真言声明の公演が行われることは知っておりまして、よく割り切って出演されるものだと思っていたのですが、ずっと後になって聞いたところでは、ある宗内で火の出るような議論があつて、管長が両論を踏まえた上で出るべしと判断をされたことがあるそうです。私たちもいろいろと得失を判断した結果、多くの方々に修二会の声明を知っていただく機会としていいのではないかと、ただ二月堂の勤行をそのまま持って行くわけには行かない、別火坊での稽古の場を講演会場に移す形なら、ということによってようやく決まったのです。ですから

ほんぎょう じゅうえ
 本行の時の重衣などは着けない、坐ったままで唱えようということだったのですが、打ち合わせを繰り返すうちにそれでは格好がつかないということになって、日頃の法要と同じ衣を着けて幾らか所作も加えるというように変わりました。しかし、いよいよ朝日講堂の舞台に立った時には、皆一所懸命になりまして声もよく揃いましたし、熱のこもった声明になったと記憶しています。その時の来聴者の中で、わざわざ二月堂に足を運んで聴聞された方々がかなりおいでになったのです。その年の修二会で悔過、宝号を唱えていますと、時々周りの局でサラサラッというさざ波が寄せるような音があるので、何だろうと思っていましたが、あとで聞きますと、朝日講堂の時に配られたテキストをお持ちになって、掲載されている唱句を追いつながら聞かれていた方が随分おられたようで、一斉にページをめくる音がそんな風に聞こえたのです。難しい問題がありましたけれども、そんな結果になってよかったと思っております。

佐藤 芸能部としては、お寺にお願いするのにどう身をよじってもお金が出なかったのです。どうしてもお礼が4人分しか出ないから、その範囲でお唱えいただけるものをしていただくと考えておりました。それでお寺にお願いに上がったのですが、金のことは気にするなと最後におっしゃいました。結局全員、11人おいでいただく結果になりました。このような場で言ってもしょうのないことですが、お国の文化財行政は非常に貧困だと、そのとき痛感した記憶がございます。修二会の声明を聞き取れば二月堂まで来い、これは私自身が言われたことです。そういう時代でしたから、東京まで11人お出ましいただくのは大変な、言ってみれば英断だったろうと思いますし、お出ましいただくためにいろいろなことがあったのだらうと思います。とにかく、反響は大変に良かったという記憶がございます。

高桑 本当にいい関係を結ばれて、寺事の研究が実を結んでいかれたのですね。それまではお水取りという、松明やお水を汲むところ、そういうところがクローズアップされていたのが、実は小さなお堂の中で毎晩何時間も私たちのために祈って下さっている、ということをいろいろな方に知っていただけた意味は大変大きかったと思います。現在では多くの方がお出でいただくようになりましたが、近年の修二会についてどのように感じておられますか。

橋本 私は、最初に申し上げましたように立派に修二会を勤めたわけではありませんので、修二会の現状についてあれこれ偉そうなことは言えないのですが、前にはなかったような問題があることは否めません。今の東大寺は人材難で、現役の人たちは幾つかの役を兼務して勤めている状態ですので寺内の者だけで練行衆を勤めるのが難しく、末寺から何人か来てもらっています。練行衆の発表の時に異を唱えてはいけないことになっているのですが、続いて選にもれると不満をいう人があるくらいですから、仕事が忙しいからと言って参籠を断る人はこれからも恐らくないだろうと思います。修二会は練行衆だけではできません。周りで沢山の人が奉仕をして下さってこそできるのですが、中には信州や九州から来て三役や童子を勤めて下さる方もあるのです。自分の仕事を持っておられる人たちだからできることでしょうか、ひと月近く仕事にけりをつけて来て下さるのは、やはり並大抵のこと

ではないと思います。それから、修二会の間には仙花紙^{せんかし}を沢山使いますが、それを寒中に漉いて下さる方、松明を作るのに欠かせない藤蔓を河原の土手から雪を掻き分けて掘って下さる方、そういう無数の方々の力で支えていただくからこそ修二会ができるのですが、それをいつまでも期待していいのかという不安もあります。

もうひとつ、二月堂の内外が非常に混雑するようになったのも頭の痛い問題です。私が子供の頃は、12日の籠松明^{かごたいまつ}を見る人たちでかなり賑わうことがありましたが、常の日には松明の時でさえ人が少なかったですし、堂内に入ると寂しい位でした。横道先生や佐藤先生が調査においでの際は幾らか聴聞者が増えてきた時代でしたが、それでも今のようなことはありませんでした。それが近年は初日から昔の12日以上混雑ですし、12日の松明の時などは前の広場から鐘楼の辺りまで人が溢れて危険な状態ですので、警備担当の人たちは非常に苦勞をしています。堂内も混雑しますし、周りの局でも私語をする人が多くて騒がしい時がありますので、過去帳の読み上げや大導師の祈りなど、聴きとれないことがあります。カメラや携帯電話のフラッシュがチカチカ光るとか、暗闇の中で液晶の光が沢山揺らめいて目障りだという苦情を聴聞の方々から聞くことがあるのですが、有効な対策がなくて困っています。伝統行事の維持という点からも、修行の場を護るためにもありがたいことなのですが、それだけ修二会のことを知って下さる方が増えたということが、修二会を支えて下さる力に繋がるという一面もあると思うのです。昔は、特定の信者さんたちを別にすると、熱心に参詣される方、声明を聴聞される方はごく少なかったのですが、今は、毎年幾日も通って来られる方や、修二会以外の法要にも絶えずおいでになる方が相当いらっしゃるのです。テレビで見たから一度行ってみようというので来られるようになった方でも、そのうち手を合わせて拜んでおられたり、中には仏教のことをもっと知りたいとか、華嚴の本を読みたいなどとアドバイスを求められることがあります。勿論、大群衆の中のごく限られたの方々には違いありませんが、そのことも忘れてはいけないと思っています。修二会がこれからどうなっていくか、心細い点もあるのですが、ご理解とご支援をお願いいたします。

高桑 佐藤先生、いかがでしょうか。

佐藤 今、広がることは悪いことじゃないというお話でございました。その通りだと思います。しかしながら、お松明だけがお水取りだと思っていましてお帰りになる方がいる。これはちょっとまずい。広がりが深まりになって行って欲しいという思いがございます。お松明が上がるのを聴聞にいらっしゃる、それは結構なことだし、火というものがいかに人間の心をかき立てるのか見せつけられる思いがするのですけれども、これにしても、風格のある松明とそうでない松明があるんですね。やはりお坊様だけでなく、周りにおられる方々も心して鍛錬なさるべきじゃないかと今は思っております。

橋本 これは厳しいお話です。何年か前から、松明を振ると歓声が上がったり拍手をする人があったりするのは。舞台の向かって左端の欄干の所でひとしきり振ってから右の角へ行ってまた振るのですが、燃えさかる松明を担いだ童子さんが駆けると、また歓声と拍手という調子です。松明を派手に

振る人もあって、前にはなかったことだという御指摘はその通りという外はありません。暗闇の中から大きな松明の火がゆっくりと現れてくるところに何ともいえない荘厳さがあるのですが、そういう感じとは違ったものになっています。寺側でもそういう傾向をいいこととは思っていませんので、別火中に堂司が注意をしたりしているようですが、日頃目立たないところで地味な仕事をしてくれている人たちが表舞台に立って喝采を受ける気持は、格別のものがあるらしいのです。普通にやるつもりでいた人でも、その場に立つとつい張り切ってしまうということがあるのではないかと思います。事故を防ぐために投光器を使ったりスピーカーで繰り返し注意を呼びかけたりすることなど、やむを得ないことも含めて修二会には相応しくないことが幾つもあるのですが、寺の者も、修二会らしい環境を守りたいという気持は皆が持っていると思います。

高桑 長く続けてこられた中にはいろいろなことがあったように、今はまた新しい局面に立ち向かわれているように思います。聴聞者がいてこそこのこれからのお水取り、修二会という気もいたしますので、私たちもどういう気持ちで聴聞するか、心がけなくてはなりませんね。

たいへん大きな行ですので、1時間半の対談ではうかがえなかったこともございますが、そろそろ時間になりました。この辺で終わりにしたいと思います。橋本先生、佐藤先生、どうもありがとうございました。最後になりますが、皆様どうぞ修二会にいちどいらして身をもって体験していただけたらたいへんうれしく存じます。

原稿作成協力：仁尾洋子

[Summary]

Record of a Colloquy on Shunie at Todaiji Nigatsudo

HASHIMOTO Shoen

SATO Michiko

TAKAKUWA Izumi

The theme for the 6th public lecture of the Department of Intangible Cultural Heritage held on October 22, 2011 was *shunie*, a religious ritual celebrated every March at Todaiji Nigatsudo. *Shunie*, popularly known as *Omizutori*, has a very old history, having been started in 752; it has continued since then even during times of conflict. SATO Michiko, Researcher Emeritus of the Institute, began to investigate the *shunie* from 1966 and has published many reports. As part of the public lecture, a colloquy was held between the former chief priest HASHIMOTO Shoen of Todaiji and Ms. Sato. In the colloquy, Mr. Hashimoto expressed his devout thoughts from the point of view of someone who has actually celebrated *shunie*, while Ms. Sato gave insight into her thoughts regarding her more than 40 years' investigation of a ritual in which women are prohibited from participating. A record of that colloquy is presented.

Research and Reports on Intangible Cultural Heritage
Number 6
2012

Publisher:

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo
13-43 Ueno Park, Taito-ku, Tokyo, 110-8713, Japan

無形文化遺産研究報告 第6号

平成24年3月26日印刷

平成24年3月29日発行

編 集	独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 『無形文化遺産研究報告』編集委員会	
編集委員	無形文化遺産部長 無形文化財研究室長 音声・映像記録研究室長	宮 田 繁 幸 高 桑 いづみ 飯 島 満
発 行	独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-43 電話 03 (3823) 2241	

© 独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所 2012

National Research Institute for
Cultural Properties, Tokyo